

日本学術会議化学委員会分析化学分科会（第 24 期・第 1 回）議事録

日時： 平成 29 年 12 月 27 日（水）13:00-13:45

場所： 日本学術会議 6-B 会議室

出席者（敬称略）： 加藤昌子、尾嶋正治、谷口功、竹内孝江、齊藤公児、玉田薰、佐藤
縁

欠席者： 一村信吾、栄長泰明

記録： 佐藤 縁

配布資料：

資料 1 化学委員会分析化学分科会名簿

議事：

1. 24 期分析化学分科会役員の選出：

一村委員を委員長、谷口委員を副委員長、竹内委員および佐藤委員を幹事とした。

2. 23 期の活動報告

23 期は分科会を全部で 10 回開催し、活発に活動をしてきた。活動記録・報告書を出す案については重要性は理解していたが、マスター プランへの提案を通す方向へと基本方針を変更し、それに向けてシンポジウムの開催等も含めて十分に活動を行ってきた。

◎ 2017 マスター プランへの提案、応募

・今年日本化学会の春季年会では、鈴木前委員長、尾嶋副委員長、一村副委員長の 3 人で、マスター プランの提案についての説明をするシンポジウム企画も行った。提案は今期はヒアリングまではいったが、重点大型計画としての最終的な採択には至らなかった。なお、採択された重点大型計画 28 件のうち 2 件は化学委員会関連である。

・平成 29 年（本年）9 月、JASIS シンポジウムにて、「イノベーション創出に向けた計測プラットフォームシンポジウム」を開催、アンケート結果もまとめた。

・日本学術会議の講堂を利用して、合同シンポジウム（日本学術会議、日本分析化学会、日本分析機器工業会等）も 2 回開催した。

・このような中で、これまでの活動については、前期 23 期と合わせて 24 期中には記録を残した方がよいのではないか。

3. 24期の活動方針

◎「2020 マスタープランへの挑戦」、「シンポジウム継続開催」、「記録（報告書）を作成して残す」、を今期の活動の中心としたい。

（これに関する意見等）

- ・マスタープラン：2017 の提案では、内容は良かったが、活動拠点・主体が決まっていなかった点が弱かった。
- ・ヒアリング結果内容については、もう少し把握した方がよいかもしない。
- ・（国の動きとして）共同利用関係の予算は減っているようだ。方針が変わってきてている。国内に絞っての方策のみでは提案は通りにくいかもしない。
- ・シンポジウムは年一回は開催する。シンポジウムの内容は「AI と分析技術」がよい。日本分析機器工業会（JAIMA），JASIS などもここを知りたいはずであり、実際にここに産業界のニーズもありそうである。
- ・経済産業省は IoT・センシング・センサのキーワードで動いている。
- ・外国の動き（IBM：医療の診断を AI で行う方向に）の紹介。
- ・AI は、分析機器の高感度化高分解能化に重要であるが、さらに複数の計測機器からでてきたデータを統合して答えを出すにも必要。前者は分析機器メーカーが取り組んでいるが、後者の AI 開発を行うプラットフォームが重要。
- ・AI 利用時のデータ・出てくる情報の信頼性、信憑性も合わせた議論が必要。
- ・現時点では誰を講師に呼べば全体が見えるのか。完全に人材不足。つなぐキーパーソンはどこにいるか。NEDO プロジェクト（一村先生）の報告書も参考になる。
- ・一台の機器内+AI, 異なる機器からのデータの処理に AI、でてきたデータ・情報をどう使っていくかの発展的 AI 利用、と、分析化学と AI に関しては切り口がたくさんある。段階を追っての企画が必要。
- ・分析と AI：シリーズものとしてのシンポジウム企画が必要かもしれない。来年 9 月にはプレ的な会議を設けるべき。
- ・昨年までの提案のもの（大型研究計画マスタープラン）は、タイトルとして「AI 分析プラットフォーム」など AI を表に出したものに改変して、AI を駆使した装置を対象に据えるのもよい。オンライン分析→ビッグデータ→ 製品までをセンシングしながら管理作製するプロセスモニタとしても AI は重要。AI と分析化学が新しい産業を作り出す。
- ・医療関係、安全関係（交通等）にも重要。環境モニタリングだけでなく、人

工物の管理にも AI+センシングは必要。人手でまかなってきたものを人口減少の現在、新しい産業ができるはず。

・人工物（インフラも）の故障の解析の時間短縮も重要。

- ◎ センシング+A Iと分析の相性はよいので 24期はこの方針で進めたい。
- ◎ 来年9月（JASISシンポジウムとの合同などがよいかもしない）を目標に、一度開催する。いつ頃何をするかについては、これから決めていく。
- ◎ 2020マスタープランにむけて、今期は上記の内容で進める、という方針で合意。

4. その他

IUPAC関係（竹内委員より）：来年4月に奈良女子大学において開催されるIUPAC分析化学ディビジョン会議（4月25-26日）およびIUPAC分析化学ワークショップ（2018年4月27日）」の準備状況の報告があった。

以上